

## ■ PCN だより

### PCN Volume 68, Number 12 の紹介

2014年12月発行の *Psychiatry and Clinical Neurosciences (PCN)* Vol. 68, No. 12 には, Regular Articles が4本掲載されている。今回はこの中より海外から投稿された3本の内容と, 日本国内からの論文については, 著者において日本語抄録をいただき紹介する。

#### (海外からの投稿)

##### Regular Articles

1. Influence of age of onset on limbic and paralimbic structures in depression

*N. Jaworska, F. P. MacMaster, X-R. Yang, A. Courtright, S. Pradhan, I. Gaxiola, F. Cortese, B. Goodyear and R. Ramasubbu*

Mathison Centre for Mental Health Research & Education, University of Calgary, Calgary, Canada

Hotchkiss Brain Institute, Calgary, Canada

Alberta Children's Hospital Research Institute, Calgary, Canada

うつ病において発症年齢が脳辺縁系および傍辺縁系の構造に及ぼす影響

【目的】大うつ病性障害 (MDD) を小児期/青年期に発症すると疾病負担が大きく, また成人発症とは異なる臨床的プロファイルを伴う。本研究は, MDD の発症年齢が成人期の傍辺縁系/脳辺縁系構造における体積異常に及ぼす影響について検討することを目的に行った。【方法】うつ病患者 (45 例) と健常対照者 (19 例) において, manual tracing 法を用いて前帯状皮質膝下野 (sgACC), 海馬および尾状核の体積を測定した。MDD 患者を小児期に発症した者 (18 歳以下, 17 例) と成人期に発症した者 (19 歳以上, 28 例) に分け, 健常対照者と体積を比較した。【結果】成人期 MDD 発症群の sgACC の体積は小児期発症群ならびに年齢, 性別をマッチさせた健常対照群の同部位より小さかった。尾状核と海馬の体積には差は存在しな

かった。sgACC と海馬の体積はうつ病の重症度と逆相関がみられた。【結論】意外にも, MDD の小児期発症と sgACC, 海馬および尾状核のより顕著な体積の減少との相関は認められなかった。しかし, MDD の発症年齢は疾病の神経生物学的な異質性を理解するための研究を行う上で有益な指標となると考えられる。

2. Cortical atrophy, reduced integrity of white matter and cognitive impairment in subcortical vascular dementia of Binswanger type

*W-B. Jung, C-W. Mun, Y-H. Kim, J. M. Park, B. D. Lee, Y. M. Lee, E. Moon, H. J. Jeong and Y. I. Chung*

Department of Biomedical Engineering and FIRST, Inje University, Gimhae, Korea

Binswanger 型皮質下性血管性認知症における皮質萎縮, 大脳白質微細構造の統合性の低下および認知機能低下

【目的】脳磁気共鳴画像法 (MRI) における白質高信号域 (white matter hyperintensities: WMH) 所見と認知機能障害の関連が認識されて久しい。しかし, まったく同様に WMH が出現している被験者の間でも, 認知機能には大きな差があり, 正常から認知症に至るまで様々である。今回の研究は, Binswanger 型皮質下性血管性認知症 (SVaD-BT) 患者と認知機能が正常で WMH がある群 (ncWMH) との皮質萎縮ならびに大脳白質微細構造の統合性を比較することを目的に行った。【方法】SVaD-BT 患者 11 例と年齢, 性別, 教育, および WMH のグレードでマッチさせた ncWMH 患者 11 例を対象に, 皮質萎縮を調べる 3 次元体積画像と, 大脳白質微細構造の統合性を調べる拡散テンソル画像を含む MRI 撮像を行った。【結果】SVaD-BT 患者は ncWMH と比較して, 前頭部 (特に前頭極, 中心前回および前頭葉内側皮質) と頭頂部 (特

に舌状回)に皮質萎縮を示し、続いて側頭部(特に紡錘状回と中側頭回)に萎縮を示した。SVaD-BT患者では、皮質萎縮に加えて、脳梁の膝と膨大部において低い異方性度と高い平均拡散能を伴う統合性の低下が検出された。【結論】我々の所見はncWMHからSVaD-BTに至るまでの認知機能低下は、皮質萎縮と大脳白質微細構造の統合性の低下と関連がある可能性を示唆している。

### 3. Serum levels of desacyl ghrelin in patients with schizophrenia on clozapine monotherapy

A. Wysokiński, M. L. Kowalski and I. Koszewska

Department of Old Age Psychiatry and Psychotic Disorders, Medical University of Lodz, Lodz, Poland

#### クロザピン単剤療法中の統合失調症患者におけるデスアシルグレリン血清中濃度

【背景】デスアシルグレリンは空腹を刺激する強力な作用を有するペプチドであるグレリンの機能的阻害物質であると考えられるホルモンである。【目的・方法】我々はクロザピン単剤療法中の統合失調症の被験者24例と、年齢と性別でマッチさせた健常対照者24例において、デスアシルグレリンの空腹時血清中濃度を測定した。生化学的測定および人体計測を生体インピーダンス解析による体組成の測定と併用した。【結果】クロザピン服用患者と対照群の間でデスアシルグレリン濃度に差はなかった(272.09±137.96対259.62±140.91 pg/mL,  $z=0.17$ ,  $P=0.87$ )。クロザピン群では、グレリン濃度に男女間で差はなかった(246.66±123.17対295.39±151.77 pg/mL,  $z=-0.98$ ,  $P=0.32$ )。クロザピン群では、グレリンの空腹時血清中濃度はウエスト・ヒップ比(WHR) ( $r=-0.45$ ,  $P=0.03$ ) およびイオン化カルシウム ( $r=-0.45$ ,  $P=0.03$ ) と負の相関を認めた。WHRに関する世界保健機関が定めたカットオフ点を超えていた患者群はそうでない患者群に比べてグレリン濃度が低かった(246.84±114.34 [Q1=152.18, Q2=220.92, Q3=327.85] 対 400.30±123.36 [Q1=283.73, Q2=414.03, Q3=485.8] pg/mL,  $z=2.52$ ,  $P=0.01$ )。クロザピン群におけるグレリンの空腹時血清中濃度は、以下の因子とは相関を認めなかった: 年齢, 身長, 体重, 肥満度指数, 腹囲, 胴囲, 臀囲, WHR, 血圧, 総コレステロール, 高比重リポタン

パク質, 低比重リポタンパク質, トリグリセリド, 尿酸, ホモシステイン, グルコース, インスリン, クロザピン用量, 抗精神病薬による治療期間, クロザピンによる治療期間, 総脂肪, 目標脂肪, 基礎代謝率, 目標体重, 除脂肪体重, 体水分, インスリン抵抗性のホメオスタシスモデル評価(HOMA) 1-IR, HOMA2-IR および定量的インスリン感受性検査指数。【結論】我々の結果からは、クロザピンによる治療はデスアシルグレリン濃度に影響を及ぼすとは結論付けられなかった。また、これまでにデスアシルグレリンと様々な代謝パラメータの関連が報告されているが、我々が研究の対象とした集団では再現されなかった。

(文責: 富田博秋 PCN 編集委員)

(日本国内からの投稿)

#### Regular Article

1. Long-term efficacy and safety of blonanserin in patients with first-episode schizophrenia: A 1-year open-label trial

Y. Ninomiya, S. Miyamoto, T. Tenjin, S. Ogino, N. Miyake, Y. Kaneda, T. Sumiyoshi and N. Yamaguchi

初回エピソード統合失調症患者に対する blonanserin 長期投与の有効性と安全性: 1年間のオープンラベル試験

【目的】Blonanserin (BNS) は日本で開発された第2世代抗精神病薬である。本研究では、初回エピソード統合失調症(FES)患者を対象にして、BNSを1年間投与し、その有効性と安全性を検討した。【方法】23名のFES患者を対象とした。BNS(2~24 mg/日)をオープンラベルで1年間前向きに投与し、臨床評価を試験開始時, 2, 6ヵ月後と1年後に実施した。主要評価項目は、主観的ウェルビーイング評価尺度短縮版日本語版(SWNS-J)と統合失調症の生活の質評価尺度日本語版(SQLS-J)、副次評価項目は、陽性陰性症状評価尺度(PANSS)、統合失調症認知機能簡易評価尺度(BACS)とした。安全性は血液生化学検査, 体重, 錐体外路症状を調査した。【結果】1年後に14名(60.9%)が内服を継続していた。SWNS-J, SQLS-J, BACSの下位項目と、PANSSの全項目が有意に改善した。BNS治療による抑うつ症状の改善は、主観的

ウェルビーイングと主観的生活の質の改善および言語性記憶の改善と相関した。安全性については1年間で有意な変化を認めなかった。【結論】BNSはFES患者に対して長期間にわたって優れた安全性を示し、全般

的な精神症状を改善させるだけでなく、主観的な健康観や認知機能にも効果がある可能性が示された。本結果を確認するために、今後さらに大規模な試験が必要である。

---